## 2回目の説明会(2011.6.4)の読み原稿(資料配付なし、開示請求で入手)

## 【別紙4】、地震発生から津波被害まで、

これから説明することは、前回のよう生生の説明で大きくふれられなかった「地震」から「津波被災」までの約50分間に、子どもたち・先生方そして地域の方々は、何を話し、どう行動したかを聞き取りそのままにまとめたものです。話を聞いたのは、直接被災した4名を含めて24名の子どもたちとまる。 先生、そして河北総合支所の職員になります。子どもの記憶の曖昧さや異なる点はありましたが、その場にずっといたのは子どもたちですので、約50分間の流れが客観的に分かるものと思っております。子どもたちの心のケアを第一に考え、時間がかかりましたことをお詫びいたします。

「聞き取りをそのままにまとめた」とある。

「子どもたちの心のケアを 第一に」と書いてあるが、 二日間で終わらせていて、 報告書作成後、メモ等の資

料は廃棄してしまった。特に重要な証言をしそうな津波に遭いながら助かった5年生の児童の聞き取りは、保護者に連絡せず、市教委の指導主事が行った。

防災無線のサイレンがなって、「大津波警報が出ました。海岸沿いは危険ですので高台に避難してください」という声を聞いた。 それを聞いて、「ここって海岸沿いなの」という女子や「山さ逃げよう」とかいう男子がいたが、そのまま引き渡しを続けた。先生

2011年6月4日の時点でこのような説明があり、聞き取りを受けた児童も、そう証言したと言っている。ところが、いつの間にか市教委の報告から、山への避難を訴えた子どもの存在は消されている。

その後、追及を受けても「子どもの記憶は変わるもの」「山に逃げようという子どもがいたかどうかは重要ではない」等、二転三転の言い訳を続けた。

検証委員会が再度子どもに聞き取りをしたが、その際「山へ逃げようと言った子どもがい たかどうか」の質問をしていない!

## 5 子どもたちの声

危機を察知した住民は逃げます。でも、危機を察知した子ども は逃げられません。山に走った児童は列に戻されました。避難を 訴えた声は聞き入れてもらえませんでした。



狭い通路を通って子どもを移動させる途中で、津波が襲いました。その瞬間の先生方の気持ち を考えてください。彼らの後悔、無念さを。

目の前に津波が来てからでは、子どもの命は守れないのです。

あのとき、子どもを守ることができたのは教師しかいません。教師はあの校庭から子ども達を 連れ出すことができる存在です。救うことができる存在です。素晴らしい使命をもっています。 すべての教師はこの場所に立ち、その自覚をいっそう強くしてほしいと願います。

どんなに寒かったでしょう。どんなに怖かったでしょう。どんなに生きていたかったでしょう。 子どもたちの声に耳を傾けてください。お願いいたします。